

あなたは自分の渇きに気付いていますか？自分の魂の渇きに気付くとき真の礼拝者に変えられていきます。

■ ヨハネ4：13、14

井戸の水は飲んで渇き、また渇き、一時満ちたと思っても、それは永遠に満たされる事も溜まる事も溢れることもありません。満たされたために、イエス様以外に満たしを求めていませんか？イエス様が与えられる水とは、あなた自身が源泉となり他に求めなくてもそこから湧き出る者となることのできる水です。その命の泉は礼拝を通して流されていき、生活の中にまで流れていきます。“真の礼拝者”になるということは、真の礼拝を捧げ、礼拝を受けるものとなっていき、そのところで“まことの主人”に出会っていくということです。

■ ヨハネ4：15～18

サマリヤの女の魂は渇ききっていました。水をイエス様に求めました。イエス様はすぐにでも女に井戸の水を与えることが出来る状況でした。しかしそうはされなかったのです。なぜなら、女の渇きの奥にある深いところ... 罪にフォーカスするためでした。女の罪であり、また、そうしてしまう渇きの原因の心の深い井戸の奥深くにおりていくためでした。救いとは私たちが恵みを受けてそれが終わりなのではなく、救いとはイエス様との関係が回復するところにあります。その為に、関係を妨げている罪を悔い改める必要があります。罪の根本の壁を取り除く必要があります。罪の石が井戸の中にあるならそれを取り除かなければ泉が溢れるようにはならないのです。リカバリーとは傷の癒しではなく神との関係の回復です。その部分を間違えると自分の傷のための黙想になってしまい、その為傷が広がって結果傷つきそこで終わってしまうということがあります。リカバリーの回復の働きはとて、キリストとの関係がもう一度結ばれることにあるのです。そこには段階があります。

1. アンカバリー 部位を開いてどこが悪いのかをみて向き合います。
2. ディスカバリー そこに何があるのか、何が問題なのか、検査をし、分析し、良性なのか悪性なのか見る必要があります。罪を自覚し、告白する必要があります。取り除く必要があります。
3. リカバリー 罪を悔い改め、神に立ち返り、キリストとの関係を維持しながら生きていく、イエス様を主として生きていきます。

関係の回復までいかなければ本当のリカバリーにならないのです。回復までいったときにイエス様の命の泉があるのです。回復のプログラムや働きに命の泉があるわけではないことを知らなくてはいけません。私たちは目指すゴールを間違えてはいけません。働きに献身するのではなく、イエス様ご自身のゴールをキープし、そこに井戸を掘っていくことをいかなければまた渇くのです。

■ ヨハネ4：17

この箇所は霊的に捉えなければなりません。イエス様が言われたのは、「女よ、あなたに本当の夫がいないのはもっとも当然である、なぜならあなたにまことの主人は私だけだから、どれだけの夫がいってもあなたにまことの命の水を湧かせることが出来、魂の渇きを満たすことの出来る夫は、私一人である、私以外にまことの主人はいない、私だけだ。」とされています。あなたはまことの主人に出会っているのでしょうか？まことの主人に礼拝を捧げているのでしょうか？また、そのお方だけにフォーカスしてすべての営み、働きをしているのでしょうか？あなたの魂の救いの為に、真の礼拝者とはイエスさまと繋がることから始まります。イエス様を主人としていく生き方それが真の礼拝者の姿です。

■ ヨハネ4：19、20

当時、女性にとって結婚は生活の手段であった為、女性から別れることは出来ませんでした。女は、5回も夫に捨てられ何度も傷つき何度も痛みを負っていたのに、それでもまたそのような状況にいたのは、そうしなければならぬ必要があったからでした。女が一番依存し、寄り頼んでいたのが夫であり、そこにこそ彼女の一番の渇きがありました。イエス様と出会い、罪に気付いた時、女は礼拝への飢え渇きがありました。罪が示されるならば神の前に出て、その罪の重みを取り去らざるを得ないのです。もし今、あなたに渇きが無いとするなら、逆にイエス様の前に行かなければなりません。イエス様の前で内面が見えるようになり、イエス様の光でしか内面は照らされることはありません。その暗闇にイエス様の光が入るときに内側の心の一番奥深くにしまっていた、井戸の一番下に誰にも見せたことの無い、誰にも触ってほしくないその奥の暗闇に光を照らしてください。自分の暗闇が、自分の中にある影が見えているとするなら... 影があるという事はそれはそこに光が当たっているからです。光が当たると影ができるのです。しかし影だけを見つめていくなら影が自分と一つになって自分が影の存在に思えるかもしれません。私たちは光の子とされ、光の中に歩むものとして、イエス様と歩むものとされています。本当の意味で悔い改めるといえるのはイエス様の光に自分が向きを変えて光の中を歩んでいくということです。影や

後ろだけを見つめていませんか？立ち返る時に光が当たり、光が届いている事がわかります。

■ ヨハネ4：21～26

女が礼拝する場所について伺ったとき、イエスは場所ではなく対象について返答をしました。当時、サマリヤ人は肉の神バアルを礼拝していました、一方ユダヤ人は神殿で礼拝を捧げていましたがいけにえを売って商売をしていました。どちらも結果、罪の許しを体験できず、神との関係が無かったので魂が満たされることがありませんでした。そこには父なる神との愛の交わりがありませんでした。私たちは、はたして誰に礼拝を捧げているか、対象者は誰なのか、見上げているのは誰なのでしょう。あなたはイエス様を見上げて礼拝を捧げていますか？

「私が道であり、真理であり、いのちなのです。私を通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」ヨハネ4：6

礼拝のクライマックスはイエスを通して私たちが父と一つになり繋がることです。父の家に戻り、御腕に抱かれ、父の愛の中に憩う。そこに命の泉が湧き出ることを礼拝を捧げることによって体験していきます。それは礼拝にとどまりません。真の礼拝者が、霊と真によって父を礼拝します。

■ 礼拝と礼拝者は違う

ここに与えられた使命があります。存在の変化です。例えるなら、自由に歌い、自由に演奏していた者が、“演奏者”になるということです。楽譜を読み、バランスをとり、霊的なものを感じ、まわりとハーモニーをしながら、指揮者に従っていくのが演奏者です。信仰の段階もそうです。生まれわたったクリスチャンであるなら、神が恵みを与え、私たちに合わせて下さっています。信仰が進めば進むほど、難しくなるのは、私たちが神様の基準に合わせていくことが始まっていくからなのです。その為に、試練もあれば問題もあり、私たちが神の基準に、御言葉に合わせていく葛藤、苦しさがあります。その中でその人の信仰を成長させていきます。罪からくる渇き、痛みがあるでしょうか？信仰が正常に進んでいくなら、かならずそこに葛藤があり、自分を見つめることがあり、悔い改め、自問自答があります。また一歩神に近づける喜びがそこにあります。信仰の喜びとは自分の変化です。神様が願っておられる者に変えられていくその喜びです。人が変わる事、教会が変わること、環境が変わることそれぞれ大事な事ですが、そうではありません。信仰はいつも自分自身をです！私たちが自身が真の礼拝者となっていくということは、訓練・整えられること・決められたことをひとつひとつ大切に行っていく、そのことが必要です。

■ ヨハネ4：23

私たちが自身が聖霊の人になっていく存在の変化、肉の人であったのに、聖霊の人となりその事を通して聖霊の実をならせていく者となり、神様に栄光をあらわし、私たちが変えられていくなら、その事が真の礼拝者なのです。“真(まこと)”とは、御言葉に従順して生きる人です。なぜなら神の御言葉に従うところに神の権威が立てられるからです。今こそ、一人ひとりが本当の意味で、家庭の回復、教会の祝福を願っていくならそこには神の権威と秩序がしっかり立てられていく必要があります。御言葉に沿って全てのことをしていくならそこに神様の栄光が一人ひとりの中からあらわれるようになっていきます。御言葉の権威が立てられていくときに、私たちは真の礼拝者となっていきます。御言葉を神として見ることができているか、御言葉自身を神様のように高い位置に置いているのか、それが真の礼拝者となるポイントです。いくら礼拝を熱心に捧げたとしても御言葉に対して従順がないのなら真の礼拝者に未だなっていません。メインの礼拝は日々の信仰生活にあり、家庭、夫婦、親子関係にあり、御霊の働きと御言葉を適用していくことです。従順のいけにえを捧げていくことがポイントになります。しかし、私たちの力ではできません。信仰生活はひとりではできません。礼拝、教会、セルフファミリー、牧師先生を通して、どのような姿に、真の礼拝者となっていくのか互いに励まし、教えあい、リサイクルしながらともに真の礼拝者へと成長していきます。共同体一人ひとりの神への従順を通して、礼拝を通して、真の礼拝者となっていくことが真のビジョンです。その恵みを受けて、遣わされて、証するものとなっていく、一人ひとりがイエス様をあらわすものとなっていく、あなたが真の礼拝者です。